

時の輪、美のくびき、パターチャーラーの声

佐藤壮広

「子供のときは父の、若いときは夫の、夫が死んだときは息子の支配下に入るべし。女は独立を享受してはならない」

「夫は、性悪で、勝手気ままに振る舞い、良い資質に欠けていても、貞節な妻によって常に神のように仕えられるべし」（『マヌ法典』5章「女の生き方」より）。

BC2000～AD2000頃に成立した、インドのヒンドゥー社会の世界観を著した『マヌ法典』。その中では「人間本来の生き方」（ダルマ）が説かれ、女性の生き方についても細かく述べられている。法典が説くのは、世襲のヴァルナ体制（カースト制度）という身分制度であり、司祭階級のバラモン、王族・武士階級のクシャトリア、庶民階級のバイシャ、奴隷民のシュードラ、そして不可触賤民のパンチャマなどのそれぞれの身分に応じ、生活規定も細かく盛り込まれている。その中で女性の生き方や役割も、男性に都合の良いように固定化されてきた。二千年前から、男性優位を正当化する仕掛けとして「宗教」が機能してきたわ

けである。そして現代ヒンドゥー社会だけではなく、人間に対する神の愛を謳うキリスト教とそれを基盤とした社会や、仏陀の教えに添って悟る修行を精緻化してきた仏教を基盤とした社会でも、男性優位の制度が強固にあり、それぞれの社会はその制度を支える物語に満ちている。

嶽本あゆ美は、女性として最初に仏弟子となった美しきパターチャーラーを題材とし、「女人往生」というテーマに迫る。人生の苦しみにあえぐ女が、高名な比丘尼に自身の苦の理由、因果を問う。物語はそこから始まる。何気ない場面だが、誰に、何のために、それを問うのか。われわれは身を乗り出し、その問いのゆくえを探ろうとする。比丘尼は、時間を過去、現在、未来に分節し、自分の歩みを語り出す。ここは作品のテーマ「女人往生」を考える起点だが、それと同時に、この問いを進める論理的な「縛り」も現れている場面である。

また、美貌のパターチャーラーという設定も、「女人往生」を考える論点のひとつだ。女性が持つ「魅力」は、諸宗教の中では欲

望を刺激し、男性を悟りや救いから遠ざける厄介なものとして、その価値を貶められ、隠蔽され、過ぎた魅力は汚れたものとされてきた。しかし、パターチャーラーは美しい。その美は、往生にどのように作用するのか、しないのか。彼女の歩みを追いつながら、この点も考えてみてはいかがだろう。

社会における女性に対する構造的暴力や差別構造を問う際、その歴史的な検証は必須の作業だ。しかしそれは単に歴史の負の側面を糾弾するためではなく、時間をかけて作られてきた固定観念や社会システムを対象化し、「構造」として抉り出し、それまでとは別の社会を模索するため。それはまた歴史の「検証」にとどまらず、新しい歴史の「叙述」にもつながるものだ。パターチャーラーの物語に、どんな可能性を見出すのか。その波瀾万丈の生（せい）が可視化する、彼女が生きた社会の構造はどんなものなのか。振り返って、いま自分たちが生きている世界はどのように見えてくるのか。皆さんの声を、聴いてみたい。



佐藤壮広（さとう・たけひろ）

宗教学・人類学専攻、山梨学院大学 学習・教育エンター特任准教授

明治大学大学院ほか非常勤講師。沖縄の精神文化、宗教に関わる表現文化について研究。

また、歌づくりの表現ワークショップ、ライブも主宰。

著書に『沖縄民俗辞典』（共編著、吉川弘文館）、論文に「心身の痛みと「場所性」の回復—沖縄のシャーマンの身体知に探る世界認識」（『文明の未来—いま、あらためて比較文明学の視点から』東海大学出版部）『政治と音楽』（共著、晃洋書房）など。